『まんじ』134 号(2014.11)

「千の風」と「赤毛のアン」

新井　宏

昨年の暮れ、交通事故に遭って第二腰骨を圧迫骨折した。当初は軽く見ていたが、八ヶ月経った今も鈍痛が続いている。しかし病状が固定したので保険会社から診断書を提出するようにという。後遺症判定のためである。

もうこれ以上良くなりませんと宣告された様で気は進まないが、妻と一緒に、救急で担ぎ込まれた丘整形外科の待合室で最後の診察を待っていた。

たまたま月曜日の午前だったので混み合っていた。妻は手の届くところにある小冊子を読み始めた。子供用の絵本のようでもあるが、風になびく草原の写真に

……私のお墓の前で泣かないで下さい……

とだけ書かれている。新井満の写真詩集「千の風になって」であった。夏の雲、秋の光、冬の雪、朝の鳥、夜の星と写真詩が続く。

急に新井満の文章が始まる。よくまとまっている文章を更に要約する。文中の年号は、後の記述との関係があるので、私が補注したもの。

郷里新潟で弁護士をしている親友の夫人が癌や脳腫瘍を患って四十八歳の若さで永眠した（一九九六年頃）。ふたりは中学の同窓で、三人の子供をもうけ、スポーツ好きの夫人は種々の社会貢献活動のリーダーでもあった。絶望の底にある友や子供達に、平凡ななぐさめの言葉を言う以外に結局何もできなかった。

しばらくすると、夫人を慕い敬愛する人達の追悼文集が送られてきた（一九九七年頃）。

その中に夫人の友人が紹介する「一〇〇〇の風」という不思議な「西洋の詩」を発見する。これが「千の風」との出会いであった。しかし、タイトルも作者も判らない。これは死者から語りかける詩ではないか。もし、この詩に曲を付け自ら歌唱したら、ささやかな鎮魂になるのではないか……。しかし何度がんばっても歌にならない。

数年が過ぎた。もし原詩が判り自ら訳詩したら曲に

なるかも知れない。

そして、やっと作者不詳の十二行の英詩にたどり着く。しかし、難しい単語はないが、いざ翻訳しようとすると、つかみ所が無く、するっと逃げてしまう。

どうやらそれを解く鍵が「風」であり、これが「死と再生の詩」と気づくと、日本語の詩がすらすら出て来て、曲も五分とかからないうちにできあがった。三十枚だけの私家版CDを作り、それを偲ぶ会で披露した（二〇〇〇年頃）。

それから三年後の二〇〇三年、新井満の友人が、このことを朝日の天声人語に紹介する。「千の風になって」が大きく羽ばたきはじめた。

私は「千の風になって」はアイルランドあたりの原曲に新井満が名訳をつけたのだと思っていた。芥川賞作家としての新井満しか知らなかったからである。

私がはじめて「千の風になって」に出会ったのは「晋州会」の解散会である。

韓国の晋州市は、かつての南朝鮮の中心地で、私の世話になっていた国立慶尚大学があるところ。戦前、道庁の地位が釜山に奪われるなかで、在住日本人が現地の韓国人と共に激しく抵抗したことから親日的であり、晋州中学校には韓国人も多く通っていた。そのため、引揚げ者の親睦団体「晋州会」には韓国からも多くの参加者がいた。

しかし、会員の老齢化が進み、二〇〇七年に熱海で解散会を行うことになり、私も特別に招待されたのである。そこで、別れの会に相応しい感動的な合唱を聞く。

その頃には既に秋川雅史のシングルも出ていて、ブームが始まっていたが、八十歳近くの会員達の企画のようには思えない。調べてみると、二〇〇四年には新井満も参画して金秀吉という韓国系の映画監督が同名の映画を作っていた。そういえば、会場には韓国のテレビ関係者も来ていたように思う。

そしてつい最近、セウォル号沈没事故で「千の風になって」がその追悼曲に選ばれ大ヒットしていることを知る。この曲は二〇〇九年に故金寿煥カトリック枢機卿と故盧武鉉元大統領への追悼曲としても使われたという。

幼ななじみの親友とその同窓の夫人の死、追悼文に寄稿した多くの人達、新井満の鎮魂への思いなどに、懐かしい青春を見たような想いであった。

その翌日、電車に乗っていると、週刊誌の広告に「花子とアン」とか柳原白蓮とか意味ありげな文章が踊っている。花子とアンは判らないが柳原白蓮なら知っている。大正三美人で大正天皇とは従妹の関係にあった歌人であ

る。

家に帰って聞くと、朝ドラのタイトルであり、アンは「赤毛のアン」、花子はその訳者の村岡花子と知る。

そこで、突然思い出した。「千の風」に「赤毛のアン」が重なり、自分達にもあった青春の日々の事を。

それは一九五三年に荏原四中を卒業してから今に至るまで毎年続いている「あさな会」のことである。

名称の「あさな」は私とS君、N君の頭音を採ったものであるが、その他にYさん、Uさんという女性も参加している。二百五十名ほどの卒業生の中で、学年を横断してのグループで、男性は小山台高校、女性は三田高校に進んでいる。当時の荏原四中では、いわばベストファイブであった。

とにかく賑やかな会で、「発言権」の確保が大変なのであるが、ある年、Uさんが、ホテルにご主人を残したまま、風雨の中、プリンス・エドワード島を夢中になって走り回って、赤毛のアンを追いかけ回したという話をしていた。七十歳近くなってからも、ひたむきに走り回る情熱にいささか驚いた。それが私達の青春の群像につながる。

私達の中学校時代は、専用校舎もなく小学校に教室を間借りしていた頃で、進学のことなどはあまり話題にならなかった。しかし、みんな当たり前のように「大人の本」を読んでいた。子供向けの本を読み終わると、大人の本しかなかったからであるが、藤村の「新生」などを回し読みしていた記憶がある。

村岡花子の「赤毛のアン」は一九五二年に出版され、少女たちに熱狂的にうけ入れられたというから、おそらくUさんの「想い」もその頃に形成されたにちがいない。

新制中学に通う生徒は総じて貧しかった。しかし貧しいのが普通なのでみんなのびやかであった。Uさんも最初は私立女学校に進んだが、父母が病気勝ちであったようで、転入して来た頃は、みんなと同じように貧しかった。お父さんが戦前の映画俳優だったとかで、侍姿のブロマイドを見たことがある。早熟で気が強く、夢見るところや肩肘をはるところなど「赤毛のアン」と似ていた。

何が彼女を惹きつけたのか。その答えは「赤毛のアン」の物語にあるに違いない。

相模原図書館に行くが、「花子とアン」のブームで全部貸し出し中である。残っていたのは英語版の「Anne of green Gables」とプリンス・エドワード島旅行記や解説本だけである。

まず、解説本の概要を見る。

一九〇八年、ルーシー・モード・モンゴメリーは、孤児に近い境遇で育った経験を元にして「赤毛のアン」を

書いた。

急ぐことでもないので、英語版で読んでみようかと、ページをめくるがすぐに眠くなってしまう。それならば手軽に済まそうと、インターネット上で「あらすじ」を探してみる。その中に、原文の四分の一近くもある「詳細なあらすじ」があった。あまり文章はこなれていないが、アニメの宣伝用に作られたものらしい。

カナダ東部のプリンス・エドワード島に住む初老で偏屈者のマシュウとその妹で厳格なマリラは、家の仕事を手伝ってもらうため孤児院から男の子を引き取ることにした。しかし、現れたのは十一歳の赤毛のアンであった。

戸惑うマシュウと怒り出すマリラ、泣き出すアン、一晩だけグリーン・ゲーブル（緑の切り妻）の家に泊めてもらえることになった。

孤児として恵まれない中に育ったアンは、気が強いが、明るく楽天的、豊かな想像力とおしゃべりで、いつのまにかマシュウとマリラの心をとりこにする。はじめは学校になじめなかったアンであるが、ダイアナという親友を得て、美しいプリンス・エドワード島の自然の中で元気いっぱいに育つ物語が前半の八割。

十五歳になったアンはクイーン学院に進み、更に大学を目指して、小学校から不仲の美少年のギルバートと競い合う。そして卒業。ギルバートが金メダルを得たと聞いて意気消沈する中に、アンがエイブリー奨学金に決まったとの知らせが入る。

卒業式に臨んで、マシュウとマリラは幸せをかみしめる。

しかし物語は暗転する。銀行が破産し、心臓の弱かったマシュウがショック死した上に、マリラにも失明の危機がせまっていた。アンは大学進学を諦めて、マリラと一緒に生活するため、村の小学校の教師の道を選ぶ。先に採用が決まっていたギルバートがそっとアンに譲ってくれたのであった。アンがギルバートと結婚することを予感させて後半が終わる。マリラにはギルバートの父とささいなことで結ばれなかった歴史があった。

通常、斜め読みばかりしている私が、この八万字ほどの「詳細なあらすじ」に一時間以上もかかった。後半になると眼が潤む。まだ涙の在庫があったらしい。Uさんもこの後半に感動したに違いない。

「あさな会」の例会は、いつも私の誕生日十二月二十四日、すなわちクリスマス・イブに行っていた。ある年の事、Uさんから急に出席できなくなったとの連絡が入った。後で知ったことであるが、その時に、今のご主人

からプロポーズされたのであった。

しばしばハイキングや山登りを共にした「あさな会」には、メンバー外からの参加者も多かった。しかし、一組のカップルも誕生しなかった。それが時代であった。

S君は、文才に恵まれながら、学生の頃は、漫画ばかり読んでいた。設立されたばかりの広告代理店、旭通信社に入り、アニメ全盛期を支える広告界の立役者となる。「巨人の星」や「どらえもん」などを手がけ、旭通信社の副社長も長く務めたが、これが意外にダメ男。

N君は日航のパイロット。こちらは山男で真面目人間、スチュワーデスと結婚、私以上に理屈っぽい。六十歳すぎてエベレストに挑戦したが成らなかった。しかし、お嬢さんと一緒に一ヶ月間も、スペインのコンポステーラ巡礼に出かけた幸せ者。

Yさんは中学一年生の頃からもう「女性の雰囲気」があり、いまでも「新井さんて、いつも洟を垂らしていたのよ」などと言う。成績もよく男の子は子供扱いされていた。高校卒業して就職してから短大に進むが、良縁あって結婚し卒業していない。

ひとりずつを紹介しながら、自分の青春時代を想う。

ところで、「赤毛のアン」は全世界で五千万部ほど売れた大ベストセラーだという。その中で、日本でも二千万人に読まれたというし、プリンス・エドワード島を訪れる日本人が、多い年には二万人を越えたというから、英語圏外では間違いなく一番であろう。

ところが、最近三十年間ほどの「赤毛のアン」の出版状況を調べてみて驚いた。日本では二十版ほどであるが、ポーランドでは四十版も出ている。版が出版部数を意味するわけではないにしても、ポーランドが圧倒的なのである。しかもポーランドの人口は日本の三分の一である。

「赤毛のアン」のポーランド語版は、スウェーデン語版やデンマーク語版に続いて一九一一年にでる。ボストン原版のわずか三年後である。なぜ北欧が先行しているのか、理由がよく分からない。プリンス・エドワードはスコットランド系移民の島で、「赤毛のアン」はスコットランド系の移民の物語であり、登場人物も全てスコットランド系だという。現在、島にはポーランド系住民は〇・一パーセントしかいない。

気になるので、更に調べてみたところ、作者のルーシー・モード・モンゴメリーは第二次大戦の戦中・戦後を通じてポーランドの英雄のような存在で、レジスタンス兵士達に彼女の本が支給されていたとの記述に出会う。

早速、「赤毛のアン」の中にポーランドを探してみるが、それらしい記述はたった一行、アンの暗唱詩の中に、スコットランドの詩人トーマス・キャンベルが二十二歳の時に書いた「ポーランドの崩落」が挙げられているだけである。キャンベルはしばしば義援金を募ってポーラン

ドの独立を支援していた。そこまでは判ったがまだ釈然としない。

そして別のことがひらめいた。もしかしたら「千の風」もポーランドと関係があるのではないかと。

新井満が「千の風」に出会った頃、間違いなく日本で「千の風」はあまり知られていなかった。いや、英詩の世界でも今ほど有名だったわけではない。

米紙によると一九七七年に映画監督ハワード・ホークスの葬儀で俳優のジョン・ウェインが朗読したとか、一九八七年にマリリン・モンローの二十五回忌にも朗読されたとある。しかし、この詩が世界的に有名になったのは、一九九六年、英国ＢＢＣが、アイルランド共和軍（IRA）のテロで亡くなった二十四歳の青年が両親に託した封筒に、その詩が残されていたことを放送したことであろう。新井満が初めて「千の風」に出会う二年前のことであった。

その後、二〇〇二年、ニューヨーク世界貿易センタービルの同時多発テロの一周年追悼集会で、父親を亡くした十一歳の少女が朗読して、人びとの涙を誘ったという。この時すでに、新井満は私家版ＣＤを作成していた。

このような経過の中で、原作者捜しにも大きな進展があった。諸説あった中で、メアリー・フライ説が確実になったのである。

メアリー・フライは孤児として育てられ、十二歳の時にパルチモアにつれて来られた。高い教育を受けていなかったが、記憶力がよく、読書家で、アンと実によく似ていた。

幸いなことに彼女は一九九八年九十四歳の誕生日にカナダのラジオ局とのインタビューで、作詩の経過を詳細に語っていた。

一九三二年、メアリーはドイツから脱出してきた亡命者マーガレット・シュワルツコップという少女と友達になった。ナチスによるユダヤ人排斥が激化する中、少女にとっては、高齢で手足が不自由な母親を連れての脱出行は不可能であった。

まもなく母親からの便りが途絶え、母親の死の知らが届く。彼女は神経がまいってしまい、慰めても泣きやまず、「何より辛いのは、母のお墓に行ってお別れを言えないことよ」と言う。

その場で、メアリー・フライは「千の風」を作って、シュワルツコップを慰める。

……私のお墓の前で泣かないで下さい……
……私はそこに眠ってはいません……

もしかしたら、メアリー・フライも、アンのようにス

コットランド詩人トーマス・キャンベルの詩を読んでいたかも知れない。キャンベルの長編詩「墓地」の中の有名なフレーズ「To live in hearts we leave behind is not to die」は、今でも墓碑銘に盛んに引用されているというし、「風にのる遺骨の風景」も出てくる。

原詩の「千の風」は、しっかり韻を踏んでいる。だから素人には作れないとして、メアリー・フライ説を否定する要素となっていたが、キャンベルの詩を諳んじていたとすれば、納得できる。

そして「千の風」を聞いて泣き止んだシュワルツコップも「赤毛のアン」を読んでいたのではないか。その頃、ポーランド内には多数のドイツ系ユダヤ人が住んでいたし、名前のシュワルツコップはポーランド系に多く、有名な歌手エリザベート・シュワルツコップはポーランド系である。

だから、この詩もホロコーストの詩集に収録されていてもおかしくない。

調べてみると、「生徒と教師のためのホロコースト詩集」の中に「ホロコーストの薔薇」に続いて、「千の風になって」が出ているではないか。

かくして「千の風」から「赤毛のアン」まで、ポーランドを仲介としてつながった。前回の『まんじ』にも「ポーランドと韓国」のことを書いたばかりである。

それがどうしたの、と言ってしまえば、それまでである。しかし、小さな偶然の連鎖であっても心が弾む。

弾み心が青春だ。

ちょうど、ここまで書いたところに、夏休みで孫達をつれて娘がやってきた。

「赤毛のアン」をいつ頃読んだかと聞くと小学校六年生の時だという。卒業生全員でタイムカプセルを校庭に埋めた時に、娘は「世界二周旅行」と題する作文を入れた。「世界一周旅行」ではなく「世界二周旅行」というのが娘らしいが、そこにプリンス・エドワード島のことを書いたのだという。三十年後に開ける計画で、それが来春に迫っている。

今まで、ヨーロッパはかなりまわったが、アウシュビッツを想うとポーランドには気軽に行く気になれなかった。しかし、夏の雲、秋の光、冬の雪、朝の鳥、夜の星を見てみたい気になった。

二〇一四。八・四

易は大赤字が続いている。

産業構造上、中国がまもなく韓国と同じことができるのは目に見えているが、日本に追いつくには時間を要する。だから、中国が更に発展するためには、まず韓国を経由することなく、直接日本と組む方がメリットが多い。

中国は豹変する。

既に韓国には痛い経験があった。韓国の低賃金産業は、技術革新に向かう代わりに、中国の低賃金を求めて中国に進出し成功を収めた。しかし、中国でも賃金の高騰が続いたため、経営が厳しくなり、更には中国政府からも見捨てられ、夜逃げ同然に引き上げざるを得なくなった。だから、韓国では中国嫌いが非常に多いのである。ギヤが入れ替われば日本嫌いよりも中国嫌いが多くなる国なのである。

その上に、韓国は軍事面で重大な課題を抱えている。米国が推進するミサイル防御体制への参加である。しかし、ミサイル防御計画は、北朝鮮の核ミサイルに対しては、距離的に近すぎて、効果に疑問がある上に、中国やロシアは猛反発するのは目に見えている。

第一、ソウルは北朝鮮国境から五十キロの大砲射程圏内にあり、ミサイル防衛体制ではどうにもならない。だから、韓国は当然、米国と日本が進めるミサイル防衛体制には参加したくないのである。そのため『戦略的に曖昧』を続けているが、これが米国を苛立たせている。

その中で、経済的、政治的に韓国が中国に近づき過ぎることが如何に危険か韓国は判っていない。

米国と日本にアセアンを加えた経済圏と中国の経済圏が対立に向かう日は遠くないだろう。しかも、インドの総選挙ではモディ率いる野党が圧勝し、日本からの投資を熱望する展開にあり、日本が中国を止めてインドに向かうのは目に見えている。その時、韓国が中国側に付くしかなければ、それが幸せとは思えないのである。

やはり、エミール・クーエの言う「努力逆転の法則」となる運命なのかも知れない。

最近の日本と中国の関係を第二次世界大戦の前の仏と独の対立に比喩する論評がある。もちろん、中国がナチスのドイツであり、日本がフランスである。米国は英国の役割であろう。ロシアは相変わらずロシアである。そうなれば、韓国はポーランドである。

第三次世界大戦などと物騒なことは言わないが、政治・経済面での世界大戦の火種に韓国がなるかも知れないと危惧している。

そして今、韓国はセウオル号沈没事件で、朴槿恵大統領ばかりでなく、韓国そのものが方向感覚を失って漂流中である。もともと均衡者外交などという高度な戦略を採れる国ではないのである。